



TITLE:

雍正時代における公費の一考察

AUTHOR(S):

岩見, 宏

---

CITATION:

岩見, 宏. 雍正時代における公費の一考察. 東洋史研究 1957, 15(4): 429-463

ISSUE DATE:

1957-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145896>

RIGHT:

## 雍正時代における公費の一考察

岩 見 宏

- 一、はしがき
- 二、公費と公用
- 三、公事と公務
- 四、公費の財源
- 五、公費の來歴
- 六、公費と火耗の提解
- 七、むすび

### 一 は し が き

雍正硃批諭旨をひもとくと、財政に關して、しばしば公項・公費・公用などの語が出てくる。またそれらと關連して公事・公務などの語があり、さらに辦公・歸公・充公などの語もたびたび使用されている。これらの語に用いられている公という概念は、その意味がはなはだあいまいで、

かつときには少しく異つた意味に使用されていることもあるらしい。しかし大體においては、これらのほとんどが地方行政と關連して使用されており、公費などの語はそのために必要な經費を意味しているようである。

ところがそのような經費は、以下考察を進めると明かになるように、正式な國家財政とは一應區別されたものであつて、しかも會典その他通常の政書類には、これについてのまとまつた規定というものがほとんど存在しない。清朝の制度を詳述して非常によくできていると評判のよい清國行政法にしても、この點については同じことであり、その後の研究論文にも、この點をとりあげたものは見當らないようである。つまりこの問題は一般史書の記述の盲點となつていたのであり、それがまたそのまま研究の盲點ともな



つていたといつてよい。しかしこの経費は、地方行政にとつてかくべからざるものであり、これなくしては行政の機能が不具状態になるであらうような重要な意味をもつことも、以下の考察において明かとなるであらう。そのような点から考えれば、これを研究の盲点として放置しておくことはできない。幸いにして雍正硃批諭旨は、これに關する豊富な記述を含んでおり、その性質上まとまつた規定という形ではみることができないけれども、そこからある程度の内容や、あるいはこれに關連したいくつかの語の意味を歸納することは可能であらう。以下の考察はこのような観点から、雍正硃批諭旨を主たる材料として行つたものであるが、しかし筆者の準備不足のために、硃批諭旨全卷を精査した結果をまとめるというわけにはゆかなかつたし、また考察の範圍をしばしば限定せざるを得なかつた。題目に一考察とした所以である。

なお硃批諭旨の引用に當つては、人名と、その奏摺の書かれた年月日を以てした。日附を記してないものは、原本にも日附のないものである。

## 二 公費と公用

前述したように、公費とは何ぞやということ定義したものは、政書類の中に見出すことはできない。このことは硃批諭旨においても同様である。しかし硃批諭旨には公費について具體的に述べたものがあるから、われわれはそこから公費の性質を明かにすることができる。そこでまず公費の内容からとりかかつてみよう。

黃炳は、義學に給與する膏火の資・物故官僚の家族の歸郷費用の補助・逃荒饑民に對する賑濟・橋梁道路の修造・義塚の置買・囚人に對する衣食の給與などの費用を種々の公費といつてゐる（元年十一月二十二日）。李維鈞は耗銀のうち五萬兩を「城堤を修理し、營房を補葺し、營伍を整頓すること、および種々の隨時の公費」にあてる旨を述べてゐる（二年八月六日）が、この語氣では城堤から營伍までの三項目はやはり公費の中に含めて考えられてゐるようである。また鄂爾泰は、省中各項の公費に、紙張・役食・修理・資助・齎奏・顔料・兵丁犒賞・部辦飯食・三年ごとの文武科場などの項があるといひ（五年十月八日）、また

別にこれとほぼ同じことを述べた中に、右の修理に對して修理衙署といい、兵丁犒賞の代りに差操犒賞と述べている例がある（六年六月十二日）。張坦麟は錢糧に一割の耗羨を加え、そのうち八分を布政司に解送して公費に充てるといふ計畫を述べ、その使途として船工・錫鑪などの項の協貼・額辦の公務・各官の養廉をあげている（五年十一月一日）。同じ張坦麟の別の奏摺の中には、督撫司道各衙門の書役の工食・奏銷・押運などの項の公費ともいつている（七年一月二十九日）。以上の例はいずれも公費の内容を網羅的に列擧したものとは思われず、詳しくあげれば更に多數の項目を指摘できようが、これだけでもおよその内容は察知することができる。すなわち大體において地方の行政上に必要な經費といふことができる。

右に述べたのは、限定を附けずに單に公費とよばれたものの内容であるが、このほかに何々の公費といふふうに記されている特定の件についての公費がある。すなわち鹽項公費銀兩（高其倬、四年六月十九日）、鹽課公費銀兩（李衛、六年十一月二十二日）あるいは鹽政衙門公費銀（程元章）などは、みな鹽政に關係したものと思われる。ただし

これらが必ずしも鹽政關係にのみ使用されたのではないことは、高其倬の場合はそれを使つて他省に赴いて麥を購入しようといふのであるし、李衛の場合も四川へ行つて米を購入入してきて平糶に充てたといふのであるから、むしろこれらの場合、鹽項とか鹽課といふのは、公費銀兩の來源を意味するものかも知れない。さらに鹽政衙門公費銀というのは、各衙門通有の公費銀のうち、ここでは偶然鹽政衙門のそれだけがとりあげられたものとも考えることができる。そうとすればこれら鹽政關係の公費としてあげてみたものも、前の一般的な公費と特に區別する必要もないかも知れない。そればかりでなく何々の公費という名稱が、單に名目だけのことで、實質は全くちがつていることもある。宜兆熊の奏摺に、

直屬の布政司衙門にはさきに錢糧平飯の一項があり、按察司衙門にはさきに驛遞公費の一項があつた。およそ各衙門の養廉および部料の飯銀などの費は、みなこれより取給した（五年九月十五日）。

と述べているところがある。これで見ると直隸按察司の驛遞公費というのは、由來は不明であるが、現實には全く按

察司衙門で費消し、驛遞とは何の關係もなかつたようである。もつとも中には特定の公費もないではない。たとえば廣西では馬塘公費というものが、これについて王士俊の奏摺には、

州縣の養廉の内から、藩司が提解するほか、驛道がまた一分を提解して馬塘の用としている（八年九月九日）。とある。これなどは使途のはつきり限定された特殊な公費ということができよう。

ところでこれまで述べてきたところでは、公費というものは地方官の中でも最上級の總督巡撫から、布政使按察使道員など、いわば省全體に關係したものに限定されているように見える。しかし公費をもつのはもつと廣い地方官全體に及んでいたようである。鄂爾泰はつぎのようにいつている。

いま黔省の大小各官にはともに養廉を議給した。もしその上に少しく公費を存したならば、各員の日用を充裕ならしめられよう（六年七月二十一日）。

これは意見にすぎないが、この大小各官というのは、養廉を支給された地方官全體を指すわけで、そうとすれば道員

に止まらず、さらに下級の府州縣官の全體に及ぶ筈である。果して田文鏡の奏摺によれば「東省各州縣扣留の公費銀」（七年六月十五日）とか「州縣は公費および解費を扣留するほか」（八年四月二十七日）といった文句がみられ、末端地方官たる州縣においても、公費の存したことが明かである。

公費の内容については、あらまし以上のようなことであるが、まえがきにのべたように。殊批諭旨の中には公費ということばと似たものに、公用ということばがあり、これも公費に劣らずひんばんに出てくる。それではこの公用とはどんなもので、それと公費とはどういう關係になるかというところが次の問題である。結論を先にいえば、これも行政上必要な經費という點では公費と格別の差異がない。以下公用の内容をしらべてみよう。

高其倬の奏摺に、

庫項を那動したについても、ただ科場・塘報への津貼および城池橋道の修理・犒兵の諸項の、やむを得ない公用だけであります（三年四月二日）。

というのがある。また阿克敦の奏摺中には「公用の賞兵な

どの項」(四年十二月九日) という句があり、この賞兵は高其倬のいう犒兵と同じものであらう。福敏も「賞兵・奏摺などの公用」(五年四月二十一日) といっている。また邁柱は「捐賑の公用」(五年三月十九日) といっており、賑災に使用される費用も公用の中に含まれたようである。さらに陳時夏は江蘇では「修造戰船・採辦顏料など公用の款項がはなはだ多い」(五年十一月六日) と述べている。田文鏡は河南の布政司庫に零星歸公という項があつて、それは「歸屬すべき項がないので、別に司庫に貯えて公用に充てたものである」といい、その中から今まで支出した項目として、聖諭廣訓ならびに毎年の上諭の刊行、學宮の樂器の補修、祭器の調達、樂舞の教師を招いて教習するため、の謝禮・接待・旅費などをあげている(七年七月二十一日)。また趙弘恩は「學院の養廉に抽幫し、塘丁の報資に捐給するなどの公用」(七年八月二十四日) といい、鄂爾泰は「各驛の馬價などの項の公用銀」(七年十一月七日) といっている。これらの内容をみると、さきの公費の場合と重複するものが多いことに氣附くが、さればといつてわすかこれだけの史料で、公用と公費とは同じものだと斷定するのも早

計であらう。もう少し兩者の性質を調べてみなければならぬ。

そこで右にみたところでは、公用は省全體にかかわるものに限定されているように思われるが、この點はどうであらうか。少いけれども府州縣にもやはり公用とよばれるものが存したのではないかと思われる例がある。たとえば府については、蔡仕艸が湖州府長興縣の貢生趙璵なる者の不法とその處分について奏した中に、かれの産業資財を官に追入して歸公し、湖州府の水利事業の經費に充てようという案を述べ「かれがむさぼり取つた本地の財物を、全部追出して本地の公用にする」といっている(八年二月八日)。この場合の本地というのは、趙璵の裁判が府で行われ、また資産を湖州府の水利事業に充てるといっているのであるから、當然湖州府を指すものとみななければならない。これによつてみれば府にも公用があつたようである。また縣については、田文鏡が河南巡撫だつた時の奏摺に、前撫臣石文焯が銀一千四十九兩零を「祥符縣庫に發して公用に備えしめた」(五年六月三日) といふことが見えてゐる。そして田文鏡の調査では、この銀の由來は撫臣の手許に入るべき規禮銀

であつて、かれはこの銀で祥符縣下四箇處の渡口に、官設の渡船を造りたいと言つてゐる。渡船を設備することも、公用と意識されていたのであろう。府以下についての用例は、今のところこれだけしかみつけない。今まであげてきたもののほか、高其倬の奏摺に對する硃批に「本省から出たものを本省の公用に還す」（三年一月二十六日）とあり、邁柱の奏摺に「通省の公用」（五年三月十九日）とあり、同じ文句は王士俊の奏摺にも見え（七年七月二十四日）、劉枬も「本省の公用」といつてゐるように、公用という語は主として省全體にかかわるものについて使われている。その點用法として公費と少し差があるように思われる。

右によつて公用の何たるかが、大體判つたものとして、つぎに公事之用ということばがある。文字からして、公用を丁寧にしたのが公事之用であるか、あるいは公事之用をつづめたものが公用であらうということが想像される。そこで兩者の同じものであることを、硃批諭旨の中で確かめてみよう。

許容の奏摺に、司庫錢糧の交代に關する報告がある。それによると公用の項下に鹽規・捐納・馬械・耗羨などのあ

ることが判るが、これらの目はみな公用を財源別に分けたものである。そしていろいろ説明したあとで、

鹽務の陋規はすでに廢止せられ、司庫の捐納はすでに滿額に達した。のこりの耗羨と馬械の二項は、地方一切公事之用となし、臣が舊に照して收支します」（五年三月十三日）。

といつてゐる。この公事之用が項の名である公用をうけていつてゐることは明かであらう。また郝玉麟の奏摺に加耗のことを述べて、それを「通省の公事および各官養廉之用とする」といい、その少しあとで同じことを「院司の養廉ならびに通省の公用とする」（七年十一月十八日）と書いてゐる。ここでは公事之用をうけて公用といつてゐるわけである。してみれば公用といい、公事之用といい、言い方に繁簡の差はあるが、要するに公事のために必要な費用と解して差支ない。事を主としていえば公事であり、費用という點に重きを置いていえば、公事之用または公用ということになる。このことはつぎの數例をみれば、一層明かになるであらう。

王士俊の奏摺に、廣東省の錢糧について述べ、

さきに督撫の議定をへて、一兩につき火耗四分を扣し、各州縣をして藩庫に解送貯蓄させ、それを一切の公用に充てました。ところが困つたことに、通省の公事ははなはだ多く、本年解送してきた火耗だけでは、本年の公事を辦するに足りません（六年十月八日）。

といつてゐる。これをみれば公用という語が公事を辦するための費用という意味に使用されてゐることがはつきりしている。また孔毓珣の奏摺中には、以前には地方で辦すべき公事は、俸工銀兩を捐して藩庫（布政司庫）に提貯して支用してゐたが、その後俸工の捐解は停止された。既に送られた俸工はそのまま庫に留めおかれたので、今となつては官僚も胥役も選してやるべきものがない。ところが地方の公事は現在では州縣の耗羨を提解して辦應してゐるので、右の俸工銀は使途がないから、戸部に報告して兵餉に充てたいと述べてゐるところがある。これに對して雍正帝は殊批して「やはり本省に存置して、地方の公用とすればよい」といつてゐるが（六年三月二十二日）、これも公用といふ語が、公事を辦するための費用という意味に使われていることは明かである。法敏が、

二萬四千兩を藩庫にわたして收貯させ、留めて本省の公用に充てたい。……さすれば地方の公事は候りを致さないでありましょう（四年六月四日）。

といつてゐるのも、全く同様である。

右のように見えてくると、それでは一體公事とは何かといふことが問題となつてくる。さきに公用の内容として考察したものが、一應それに當ると考えられるが、つぎには公事という語の用例に即してそれを考えてみよう。

### 三 公事と公務

まず公事の内容を示す史料をいくつかあげてみよう。李衛の浙江巡撫當時の奏摺中に「地方で城垣を修理するなどの項の緊要の公事」（四年六月一日）というのがあり、同じく李衛の浙江總督に昇任してからの奏摺中には、災害の場合の窮民に對する賑恤、緊要な農田の水利、戰船の修造に際しての各種の費用の津貼（補助）、補還すべき倉米の價格の不足などを「實在緊要の公事」とよんでおり（五年十二月三日）、また「地方民生に有益な城垣・水利などのよる緊要の公事」（九年七月二十一日）ともいつてゐる。福

建巡撫劉世明の奏摺中には、

福建地方で辦すべき公事の條款ははなはた多く、もと  
もと津貼船工と不敷銅價の二事ばかりではない（七年三  
月十一日）。

というのも見える。

右にあげた程度では、公事の内容を明確に規定することは困難であり、その細目は右にかかげたよりもはるかに多いことが豫想される。むしろこまごました多くの内容を含めて公事という語で概括しているような使い方が普通ではないかと思われる。たとえば、署理湖廣總督福敏の奏摺に、「布政司に解送する耗羨は、もともと省全體の公事の費に備えるものである」（五年四月二十一日）といい、宜兆熊の奏摺に「各州縣の耗羨は四分を提解して道府各官の養廉および通省公事の需とする」（五年閏三月十二日）などという用法がある。また「浙省は公事が繁多である」（甘國奎二年十一月二十四日）とか、「浙江の一切の地方公事之用」（李衛、五年九月十九日）といった言い方が多いことも注意される。

右の簡単な考察から、公事についての一應の規定をひき

出すとすれば、地方における行政行為で通常なにがしかの費用を必要とするものといったことになろうか。とくにいまみた限りでは、公事は省全體に關すること、別なことばでいえば、督撫や布政使などの立場から問題になることで、府州縣など下級乃至末端地方官に關係したものは見當らなかつた。但し殊批諭旨が主として上級地方官によつて書かれたものであるという性質から、下級地方官に關する記述が少いであろうことは當然豫期しなければならぬ。その意味ではこの點にあまり重きを置くわけにはゆかない。むしろさきに見たように、公用すなわち公事之用ということからすれば、公用の中に府あるいは縣關係のものがあつたことから考えると、公事にも當然それがあつて然るべきである。事實李衛は浙江の如皋縣における公事辦理の沿革を報告しており（九年三月七日、後述）、用例としては少いけれども、公事もやはり地方官全體の職務に關聯したものと考えられる。

ここでふりかつて公用または公事と公費との關係を検討してみよう。すでにみてきたように、公費の使途と公用の使途とは材料の關係上嚴密に一致するというわけにはゆか

ないが、しかし兩者には共通したのも多く、完全な一致はみられなくとも、ほぼ共通の性質をもつたものらしいことが看取せられた。公費・公用をそれぞれ別箇に検討する限りは、これ以上明確な結論を引き出すことは困難なように思われる。そこで殊批諭旨の中に直接兩者の關係を示すような記述を求めてみると、つぎのような例が出てくる。すなわち、佟吉圖の奏摺に「浙江省の耗羨は公用にたらないから、俸工を酌捐して諸費を濟うように請う」という冒頭で始まり、すぐそのあとに「錢糧に火耗があるのは、正項ではないけれども、しかし一切の公費はここから出ていく」と述べているものがある（二年八月二十八日）。この使用方では、公費というのははじめの公用のいい替えにすぎない。すなわち、兩者は同義語として使われているとみてよい。同じ奏摺の少しあとのところには、前任地の山東では「火耗が二割について六十餘萬兩あり、官吏の養廉以外に、地方の一切の公事については備辦して餘りがあつた」とも書かれており、前後みくらべると、公費とは公事を備辦する費用であることがはつきりする。また蘭州巡撫の許容の奏摺中には、甘肅の公費は從來耗羨の中から支給していた

が、耗羨は養廉銀にあてたので、今後は地方官の規禮を調べて公用にしたいと述べたものがある（七年三月十二日）。ここでも公費と公用とが同義語として用いられているものとみて、ほぼ誤りないであろう。このように公費と公用とをまじえて使用した例があるとすれば、さきのあいまいな結論をさらに進めて、公費と公用とは同じ意味のことばであると、はつきりいつて差支えないように思われる。

右にみてきたような公事を、その内容はしばらくおいて、一應地方官が職責上當然配慮すべき事項というふうについておくとすれば、殊批諭旨の中にはこれと似た語として公務というのも出てくる。これまた公事に劣らずたびたび使用されているので、兩者の異同もまた、解明すべき一つの課題となつてくる。例によつて公務の内容からさぐつてみよう。

まず兩廣總督孔毓珣の奏摺中には、廣東において毎年辦すべき公務として「紫榆・花梨・錫觔・白蠟・廣膠の各項を辦解する」のに對する貼補、降香の辦解に對する貼補、廣鍋の辦解、京銅の辦解、塘兵および提塘の工食銀に對する貼補、戰船の修理、軍器火藥、文武兩關の鄉試、遠年無



著の虧空、城垣堤岸の倒塌衝決（の修理）などがあげられている（二年六月七日）。蘇州布政使張坦麟は「通省の公務、督撫衙門の廩工書工・礮藥・火器の如きもの數十餘項」（五年五月二十六日）といっている。また山西巡撫の石麟は「衙署・監獄を添建することは地方の公務である」（五年十一月二十一日）といい、李衛もやむべからざる公務の一として戦船の修造に對する津貼をあげている（五年十二月三日）。田文鏡は按察司獄の建造・貢院の號房の添設・城工の三者をあげて「みな公務にかかわるもの」としており（七年三月二十日）、また別の奏摺では、「毎年の祈晴・禱雨・敬神・酬神、因公差遣の員役に盤費を量給すること、および現今錢局を修理しているなどは、みな地方の公務である」（七年七月二十一日）といっている。程元章は自分の手許に送られてくる海關の飯費銀を、地方の災害の救恤、差委の員辦の盤費、救火に盡力した兵丁に對する賞給などの用にすることが「公務に裨あり」と言っているから、これらも公務の一部と考えられていたに相違ない。これはまた「塘を築き地を墾して窮民を贍養することは、地方の有益な公務である」ともいつている。

以上公務としてあげられるいくつかの事がらは、先にみた公事の内容と比較して、やはり共通したものが多し。したがつて兩者が同一のものに對する異つた名稱であるという可能性は、この點からはかなりはつきり認めうるであらう。それではその他の點についてはどうか。公事の場合、下級地方官に關係した例が少いことに注意したが、公務の場合にも省全體にかかわるものとしての用例は多い。たとえば「通省の公務を辦理する」（孔毓珣、二年六月七日）とか「一省の公務はまさに一省の財賦を合して之を計るべきである」（張坦麟、五年十一月一日）などというのは、公事の場合と同様の例であらう。ところが公務については公事の場合と違つて、明かに州縣官にかかわる例もかなりみられる。たとえば田文鏡が「地方に一たび公務があると、從來通り里民に割り當てる」（六年七月十一日）といい、あるいは「公務の繁簡ということになると、全く地方の衝僻に比例するものであつて、錢糧の多寡とは關係がない」（七年六月十五日）という場合の地方という言葉は、省全體といつた大きな地域を指すものでなく、衝僻などといわれていることから察せられるように、より小さな地域、主と

して州縣を指すものと思われる。「里民に割り當てる」ということも、その主體を親民官である州縣官であると考え、てこそ、無理なく納得できるのである。同様な考え方からみれば、鄂爾泰が「公務という名目をかりて、依然として禁令に違反して私派をしている」（六年七月二十一日）という場合の公務も、州縣官のそれに相違ない。これらにくらべて、一層はつきりしていて疑問の餘地のない例も見出される。張坦麟が、

南昌・新建の二縣は省城の附郭であつて、なお辦すべき公務があり、ややもすれば費用を支出しなければならぬ（七年一月二十九日）。

といい、さらに趙弘恩（湖廣總督邁柱と會奏）が、  
布政司以下州縣以上には、事務の繁簡に應じて養廉ならびに公務を辦するの銀を議給する（七年九月十九日）。  
といつてゐるのなどがそれである。これらの例から判斷すれば、公務は州縣を含む地方官の全部にかかわるもので、少くとも湖廣においては、その處理に要する費用を、これら地方官に支給していたことが明かである。

公務について右のように考えてくると、その公事との關

係は使用法において若干の差異があるとはいへ、ほぼ同じ意味であるとも見ても差支えなさそうである。殊批諭旨の中には、この點を一層明白にするような記述も見られる。李衛が浙江如皋縣の公事辦理の沿革を報告している奏摺があるが、それによるとこの縣では康熙三十七年以來、輟擡之法といふことが行われている。それは官において公事を辦する際必要な經費を、民捐によつて賄う方法である。そしてその収支についての報告ではみな公務を支辦したとなつてゐる。

従前の支出した公務をみてみると、帳簿内にある毎年の城垣倉庫の修理、囚糧の不足に對する補助などのような項目は、みな絶対にかくことのできない公事である

（九年三月七日）。

と李衛はいつてゐる。この例では、公務と公事とは公く同義の語として使われている。李衛は他の奏摺でも公務と公事を單なる言い替えとして使つてゐる。すなわちはじめに「城垣などの項の公務」といい、あとではそれを「城垣水利などの類の緊要の公事」といつてゐるのである（九年七月二十一日）。同様に公務を辦理するための費用という意味で公用という語を用いてゐる例もある。福建總督郝玉麟

が布政使劉藩長の過誤について巡撫趙國麟と合奏したものがあつた、そこではつぎのようにいわれている。すなわち、

公務を辦理するためにはその費用にあてるべき耗羨がある。當然いろいろ計畫考慮して處理すべきである。ところが劉藩長はばかな奴で、耗銀の徵解がうまくゆかないからとて、だしぬけに海關の盈餘銀を出して公用に充てて頂きたいと奏請したのは、實にでたらめ至極であります（十一年十一月一日）。

この文章で公用という語が公務を辦理するための費用という意味に解すべきことは明白であらう。同じような例をも一つあげておくと、前に引用した程元章の奏摺に、巡撫のところへ送られてくる海關飯費銀を、災害の救恤その他の用にあてることが公務に裨益することだという意味のものがあつたが、その最後は「海關飯費を酌留して公用に充てた緣由」ということばで結ばれている。ここでも公用を、公務を辦理するための費用という意味以外には解せられない。

かようにみえてくると、公務と公事、しがつてまた公務の費用と公用とは、まず同じ意味と考へて差支えないよう

に思われる。そしてさきに公用と公費とが同じ意味に使われていることを論じたのであるから、それをも併せていふならば、公費または公用とは、公事または公務を辦理するための費用である、ということにならう。このような結論を補強するために、今まで引用の中に再三出てきてはいたが、わざと觸れずに残しておいた問題、すなわち、公費あるいは公用の財源がいかなるものであつたかという點を、つぎに考察しようと思う。

#### 四 公費の財源

まず公費の財源について考えると、火耗（加耗）とそれ以外のものと、大きく二つに分けられる。火耗からとつてゐる例をあげると、さきに引用した修吉圖の、一切の公費は火耗からとつてゐるという記述（二年八月二十八日）は、浙江省のことである。山東巡撫の陳世倌は、通省の公費は一割八分の耗羨から虧空の穴うめと各官の養廉に使つた残りをあてると述べてゐる（二年九月四日）。署理河南巡撫の田文鏡も、

臣が着任ののち、各項のまさに給すべき公費は、すべ

て布政司庫の耗羨銀の内から支給しました（二年十一月九日）。

といつてゐる。山東と河南については、のちに州縣官についても公費を支給しようである。やはり田文鏡（河東總督）によると、「山東省の州縣は、養廉のほかに、正銀一兩につき耗羨一分を扣留して、公費の用としてゐる。」ところが、これは河南にはないことなので、かれは河南の州縣官にも支給したいと考え、直隸州は三百兩、大州縣は二百四十兩、中州縣は二百兩、小州縣は百八十兩という基準を定めた。これは全省の耗羨一分の中から支給するもので、山東では錢糧を徴収した州縣が、はじめから一分を扣留するのとは少し出し方が異なる。そこで河南についての案が許可されたら、山東も同じやり方にしたいといつてゐる（七年六月十五日）。湖南では山東・河南とまた少し異つてゐる。すなわち、布政使朱綱によると、

州縣が徴収する一割の火耗の内、三分を錢糧と一緒に布政司に解送し、通省の公費に充ててゐる（三年十月二十二日）。

また、蘭州巡撫許容のいうところでは、

省全體としてなおかくべからざる公費があり、毎年銀二萬餘兩を必要とする。さきには通省の耗羨の内から支給してゐた（七年三月十二日）。

とあつて、甘肅でも耗羨から公費をとつてゐた。ところが許容は右の引用につづけて、この耗羨は各官の養廉に給することになつたので、その代り財源として、從來各官のつてゐた規禮銀を歸公したいといつてゐるから、以後公費の財源は規禮銀に切りかえられたものと思われる。

それではこのように羨耗以外のものを公費の財源にあててゐる例には、どんなものがあるかといへば、朱綱によれば湖南では、

前の布政使宋致の在任中、各屬をして俸給を捐出解送して公費となさしめたものである（三年十月二十二日）。という。これが雍正元年に俸給の捐出が勅命によつて停止せられたので、さきに見たように羨耗から支出するように變つたのである。また捐納の際に別に公費銀を徴収する例もある。田文鏡によると、

河北の事例では、捐穀一石を收納することに、別に公費銀二錢を徴収し、布政司に解送して充公した（六年三

月四日)。

という。率は異つても、同じようなことは他でも行われている。すなわち、貴州巡撫の沈廷正が、苗族宣撫の費用について述べた中に、

現在布政司庫には動用すべき項がない。ただ捐納の項下に存する七分の公費銀兩だけが支給できます(六年七月十六日)。

といっているのがそれである。

次に公用または公事の費用とよばれるものの財源はどうなつていたか。これも耗羨とその他のものの二つに分けられることは、公費の場合と同様である。まず耗羨の方からみて行くと、署理直隸總督宜兆熊の奏摺中には、

督臣李紱は雍正五年の各州縣の耗羨は、四分を提解して道府各官の養廉および通省公事の需とし、その残りの六分は該州縣に存留してみずから支出させたいと奏請しました(五年閏三月十二日)。

という記事がある。江西巡撫の邁柱も、雍正五年から「州縣の耗羨二分を酌提して公用に充てる」(五年三月十九日)といっている。また署理湖廣總督の福敏は「布政司に解送

する耗羨はもともと全省の公事の費に備えたものである」

(五年四月二十一日)といっている。湖廣については湖南按察使の趙弘恩が、

通省錢糧の一割の耗羨は、おしなべて軍隊の給與とともに北南兩布政司庫に解貯し、三分の公用などの項を扣存するほかは、その残りの銀兩は全部養廉に給する(六年十月十五日)。

といっている。江蘇については陳時夏が、

江蘇は賦重く耗輕きこと他省と同じくない。かねて修造戰船・採辦顏料など公用の款項がはなはだ多い。その上各員の養廉の費もある(五年十一月六日)。

といつて、加耗だけでは財源の足りないことを述べている。また孔毓珣によれば、廣西では「地方の公事は現に州縣の耗羨二分を提解して辦應している」(六年三月二十二日)。廣東では署理布政使王士俊によると、

一兩につき火耗四分を扣して、各州縣をして布政司庫に解貯させ、一切の公用に充てている(六年十月八日)。同じことを總督郝玉麟もやや詳しく述べている(七年十一月十八日)。河東總督田文鏡は、

一切の公事はすでに臣が一面奏聞するとともに、一面ではすぐに布政司庫の羨耗を支出して辦理してあります（六年七月十一日）。

といつており、河南・山東についても同様だったことが判る。福建でも巡撫劉世明が「閩省の公用・養廉は、耗羨の項下に歸して辦理すべきであります」（七年三月十一日）といつている。

右はすべて耗羨に財源を求めているものであるが、それ以外の財源はどうであつたか。まず官員吏役の俸給を使つていたものがある。すなわち、江西巡撫邁柱によれば「江省の公用銀兩は、従前ともに官役の俸工を提解していたものである」（五年三月十九日）。それをさきに述べたように、雍正五年以後羨耗で賄うことに改めたのである。同じことは廣東でも行われ、これもやはり火耗に切り替えられた（王士俊、六年十一月十五日）。

つぎは各官のとりこんでいた規禮をとり上げ、それを公用の財源とした場合がある。山東巡撫の黃炳は、錢糧の穴埋め對策を述べて、それが完成したならば、節壽の規禮は斟酌收取して公用に備えたいといつている（元年十一月二

十二日）。規禮はこの時代の政治あるいは官僚の性格を考へる場合、それ自體とり上げてよい問題であるが、ここでは公用と關聯して、つぎのような雍正帝のことばに注目しておこう。

これ（鹽規すなわち鹽商のもつてくる規禮銀）は爾の當然うけとるべき項である。それに本當の氣持をかくして名聲につとめることは朕は一番好かぬ。單にこの一項ばかりでなく、すべて分として當然うけとるべきものは、うけとつて公用にとめておいて差支えない。身一省の總領ともなれば、賞勞の費用はかならず必要である。眞情を矯めて廉潔をよそおう必要はないし、そんなことをしても何の足しにもならぬ（李維鈞、三年三月七日）。

この中で「分として」というのが曲者で、同じく規禮といつても、取つてはならない場合も多いことは注意しなければならぬ。また實際の必要という點から考えて、他に公用の財源があれば、やはり取つてはならぬことになる場合が多いようである。それはともかくとして、右のほか鹽規その他の規禮を公用の財源にあてた事實は、署理浙江巡撫福敏（三年十一月二十七日）、四川巡撫法敏（四年六月四日）、

江西巡撫邁柱（五年三月十九日）、湖南巡撫王國棟、浙江總督程元章らの奏摺中に見えており、かなりその例が多い。

つきには他項の羨餘その他、何らかの意味で餘分になつた金を公用に充てることがある。たとえば署理江蘇巡撫の何天培によれば、海關の収入には正額と贏餘とがあつて、それぞれ布政司庫、戸部に解送されるが、その贏餘というのも額がきまつていて、實際にはなおそのほかに餘分の収入すなわち羨餘がある。その處置について雍正帝は、司庫に存して地方に公用があつたような場合に支出したらよいといつている（元年九月九日）。また李衛の奏摺中には、そのような羨餘のいろいろな例が見えているが、右とやや性質の異つたものとして、つぎの二つの例をあげておこう。一つは雲南在任中に、同省に蓄えられていた錫を賣却して、原價と賣却の費用を除き、残りの利益を公用に充てたもの（四年十一月二十日）。いま一つは十萬兩の銀を借り出して、四川から平糶のための米を買い入れ、浙江で賣り出したあと、元金を返却して、利益金を公用に充てたというものである（四年六月一日、六年六月八日）。このほか一定額の支出を認められているものについて、節約し

て殘額を生じた場合も、それは公用に充てられることがある（五年閏三月一日、五年九月十九日など）。このことは一般に行われていたことと見え、署理湖廣總督の福敏は「各衙門の贏餘銀兩は、もともと公用に充てられる」（四年十月十日）といつている。前に引用した田文鏡の零星歸公とよんでいるもの（七年七月二十一日）も、恐らくそういうたぐいのものであろう。

以上のほかに特例として、浙江省では雍正帝の命令で正項錢糧十萬兩を支出し、これを耗羨と併せて、養廉と公用の財源にしている（李衛、六年五月九日）。本來耗羨だけで賄うべきところ、それでは不足なので此の處置がとられたのであろうが、こういう特例は帝の信任の厚い李衛が總督だつたことも關係があるように思われる。

公用の財源については、これで一通りの考察を終つたのであるが、はじめにも記したように、ここでは公用あるいは公事之用、公事を辦理するための費用という形で出てくるものだけをとりあげ、公務の費用として出てくるものは含まれていない。前節に述べたように、公務と公事とが同じであるとすれば、もはや改めて公務の場合をとり上げる

こともないわけであるが、一應ごく簡単にふれておこう。

公務に伴う費用の財源にも、豫想通り耗羨その他が見出される。まず耗羨を公務の費に充てることは、蘇州布政使張坦麟（五年五月二十六日、五年十一月一日）、河東總督田文鏡（前引七年三月二十日、七年五月四日）、署理湖北巡撫趙弘恩（七年九月十九日總督邁柱との會奏）、福建總督郝玉麟（十一年十一月一日巡撫趙國麟との會奏）らが述べている。また俸工の捐出についても、兩廣總督孔毓珣（二年六月七日）、張坦麟（五年十一月一日）らが述べている。規禮を公務の費にあてることも、李衛が貴州について（六年四月二十一日）、張坦麟が江西について（七年一月二十九日）それぞれ述べており、程元章の報告している海關飯費銀というのも、商人が自發的に提供したといわれるもので、その實質は規禮と同じようなものである。ただ一つ、孔毓珣が廣西の貢院を捐修したことを報告した際、雍正帝が、

捐という字は朕ははなはだ氣にくわぬ。今度だけは過去のことは咎めないが、一切の公務はせひやるべきことであれば、宜しく正項錢糧を支出すべきである（元年二

月二十四日）。

といつてゐるのは非常に奇異な感じを受ける。今までみたところでは、公務ばかりでなく、公費にしても公用にしても、正項をその爲に支出するということはなかつたのである。これは恐らく即位後日が浅く、まだ地方の状況をあまり理解してゐないときに、俸工の捐出を嫌うところから出たことばで、やがてそれではやつて行けないことを覺り、別の方針を定めた次第については、あとで述べる筈である。

右の一點を除いて、公務の財源となるものはすべて公用の財源となつたものの中に見出される。ことに兩者のいずれにおいても、耗羨を主要な財源としてゐる點が重要で、公務について指摘した江蘇・河東・湖北・福建などの地方では、すべて耗羨を公用にあてるといふ記述も見られたので、公務の費用すなわち公用であるといふことは、財源の面からものはつきりしてゐるといつてよい。ただ公用の財源としてあげたもので、公務の方で出てこないものがあるのは、兩者が完全に相覆うだけの材料がないこと、ことに公務の方がことばの使用頻度がかかるかに少いといふ事實から來るものと考えられる。



頻出度の點からいえば、公費という語も公用にくらべるとはるかに少い。しかし公務と公用の財源を比較していえることは、同様に公費と公用の財源を比較した場合にもいえるであろう。その要點としては耗羨がそれらの主要な財源となることが一つ。尤も耗羨を主としていえば、その使途としては公費または公用とならんで、つねに義廉があげられることは、さきほどからみてきた通りである。それから耗羨が財源となる以前において、官役の俸工を捐出させて公費または公用にあてていたことが一つである。公費と公用とのこれらの共通點を、前節前々節で考察したところと併せ考えれば、兩者は同一物の異稱であることは、もはやほとんど疑を容れないであろう。表題にかかげた公費というのは、實はこれらいくつかの同義の語を代表するものとして、それらを含めたものとして使用したのである。公費という語をそういうものとして使うならば、今まで述べてきたことは、すべて公費に關することであり、あげてきた材料は、すべて公費の性格なり内容を物語るものとなる。但しこれまでは、史料の時間的な前後をあまり考えずに、いわば靜止したものとして見てきたのであるが、つ

ぎの課題はこれを變遷の相においてとらえることである。それによつて公費の性格は、一層明かになるであろう。

## 五 公費の來歴

中國古來の制度では、行政に必要な役務は人民が徭役として負擔するものであり、そこに經費が必要な場合は、ものによつては政府が支出することもあるが、こまごまとした地方的な費用は、むしろ役務の内容の一部として、徭役に當る人民の負擔となることが多かつた。明代におけるそういう費用の内容や、その支辦方法の變遷については、嘗て『明代地方財政の一考察——廣東の均平銀について——』（研究三）と題して私見を述べた。その論旨のうちで必要な點をここにくり返すならば、明代ではそういう經費が里甲銀あるいは均平銀などという名稱でよばれ、後期には整理されて内容・金額ともに固定した。それとともに支辦方法としても、丁と田とに均等にわり當てて、人民一般に負擔させることになつたというのである。一方徭役の方でも銀納化が進行したが、それは結局均徭銀というような名稱で、やはり丁と田とにわり當てられた（これについては山

根幸夫「十五世紀中國における賦役勞働制の改革」史學雜誌第六十篇十一號參照）。一條鞭法の實施以後、里甲銀と均徭銀、ある地方ではさらに驛傳銀、民壯銀なども一括して賦課されるようになり、その總稱として丁銀とか丁税という名稱が一般化する。清代において地丁銀あるいは地丁錢糧とよばれるものは、そういう丁銀と田賦すなわち地税の併稱であることは、説明するまでもない事實である。

してみれば、既に地丁銀を徴収する以上、中央地方を通じて一切の經費はその中から支辨されるべき筈となる。事實康熙會典<sup>卷二</sup>雍正會典<sup>卷三</sup>などに見える起運・存留の項目のうち、地方で支出される存留の内容をみると、つぎのようなものが列擧されている。

慶賀表箋<sup>並</sup>齋進盤纏銀 拜賀習儀等銀 祭祀迎春曆日等銀 修理文廟城垣監倉銀 官員經費俸薪心紅紙張各役工食銀 驛站祇應銀 鄉飲酒禮銀 廩餼賓興考試激賞蓬廠路費牌坊等銀 襍支各項銀 襍支各項米 局糧 孤貧柴布銀 孤貧口糧 囚糧

これを明代の里甲銀などの内容と比較してみると、官員の俸給は別として、その他はほとんど里甲銀の中に含まれた

ものばかりである（前掲拙稿參照）。もつとも里甲銀の場合、地方志などに記載されたものは、はるかに項目數が多く、詳細な内容が知られるのに對し、會典の場合きわめて簡略なのは、一般的な各地共通のものをあげ、同時に數項目を併せて一項目としてゐるためで、前文にも「その梗概を存するのみ」といつてゐる。この點、やはり清代の地方志をみれば、項目ごとに金額をもあげた、きわめて詳細な記載例が見出される。繁を避けて詳しくは記さないが、たとえば光緒嘉興府志<sup>卷二十</sup>一田賦には解司存留と府縣存留を分け、乾隆杭州府志<sup>卷四十</sup>五賦税にも同様司存留・府州縣存留とを分け、いずれもその内容を詳記してゐる。これら存留の由來を明代にたどれば、田賦の中の存留にあてられたもの、里甲銀の内の地方經費にあてられたもの、均徭銀その他徭役の銀納化したものがすべて含まれてゐると判斷しなければならぬ。

右のように、存留の中に地方行政に必要な經費がすべて含まれてゐるとすれば、公費などというものを別に工面する必要はない筈である。但しそれは行政のやり方なりそれに伴う費用なりが、明代におけるものと變りなかつた場合

の話である。というのは、細かくみれば若干の變更増加はあるにしても、右に述べたような費用は、一旦項目や金額が定まると非常に固定的な性質を示す。それは何の場合にでも見られる中國的な政治方式、あるいは官僚の氣風であつて、新しい費用が必要になつたからとか、以前と同額の費用ではとても足りないからといつて、早速それに應じて正規の處置をとるといふことは、容易に行われない。それその當事者が、何とか工面してその場をしのぐという形になる。工面の仕方はいろいろあるけれども、結局のところ人民の負擔になつてくることはいうまでもない。しかしそういう裏口からの處理は、それ自體不合理であるばかりでなく、必然的に多くの弊害を伴つてくる。この點を考へて公費に暗黙の承認を與え、それに必要な財源について處置したのが雍正帝であつた。そこでつきには、雍正帝の改革について述べるわけであるが、それに先立つてまず改革以前の狀態を、とくに財源の點を中心にして説明しておく。

財源といつても、何らかの形で人民のふところから出ることはいまもいつた通りである。ただそれが直接的な形を

とるか、間接的な形をとるかの違いに歸する。そこでまず直接的な形で現れるものからとりあげると、その中でも特定の者に負擔させるか、一般にわりあてて負擔させるかの相違がある。前者についてはたとえば里甲に負擔させる方法がある。康熙會典<sup>卷二</sup><sub>四</sub>によれば、順治十七年に地方官が里甲に私派するの弊を禁じたことが見え、

およそ地方の各官が里甲に私派して上司に承奉し、すべて日用の薪米、衙署の修造、家具の供應、禮物の類から人夫・馬匹・民壯を募ることまで、毎年むさばり取る弊害は、全國の撫按官にいましめてみな嚴禁させよ。

とある 文獻通考卷二一にも見ゆ、雍正會典卷三一には里甲を里中と記す

典の康熙三十九年の條にも見え、そこでは湖廣などの地方のこととして、里甲が交替でそういう負擔に當ることを硬駝というと説明されている 文獻通考卷二一にも見ゆ。特定者に負擔させるもう一つの形としては、各種の規禮（陋規）がある。

規禮については既に前節にもいくつか例をあげたが、それは要するに各種の商人などが、自己の業務につき便宜を計つてもらふ意味で行うつけとどけである。中でも鹽商の出す鹽規は、規禮中もつとも大きな比重を占めていたよ

うである。これは主として個人的な収入であり、官僚の収入の中では、大きな部分を占めたと思われるが、前述したような事情からそのいく分かは、公費的なものにも使用されたであろう。しかしこれも、表向きは収受を禁止されていた前掲雍正會典康熙三十九年の條など、また商人に關係したものとしては、日用品などの調達について、商店にむりやりにやすい値で品物を提供させるという方法もあつた前掲康熙會典康熙八年の條など。

これらに對して人民一般に負擔させる方法には、また二通りのものがみられる。一つは規定の税糧に對して附加税をとる方法で、これがすなわち火耗である。火耗の徴収はもつともやり易かつたのか廣く行われたと見え、これに對する禁令も順治元年をはじめとして同十二年、康熙四年、同十八年などしばしば出ている康熙會典卷二四、雍正會典卷三、清朝文獻通考卷一、二。ただしこれ程くり返された禁令が、康熙の中年以後になると出なくなるのは、恐らく火耗の禁止が事實上不可能になつて政府としても默認せざるを得なくなつたのではないかと思われる。火耗の附加税なるに對して、いわば獨立税の形をとるものもある。さきほど引いた康熙三十九年の禁令中に輭臺と見えるのがその一つで、「合邑通里共攤同出す

るを、名づけて輭臺という」と説明されている。これは湖廣地方のこととして記されているが、硃批諭旨の李衛の奏摺中には、浙江如皋縣のこととして硬臺・輭臺の法というのが報告されている。それによると同縣では康熙三十七年以前において硬臺の法なるものが行われ、地方の公事は田土面積を考えて日わりにしたという。同年この法が禁止されて輭臺の法に變つた。これ以後「公事は官辦に歸し、銀兩は民捐より出でた」という。恐らくこの輭臺は會典に見えるのと同じものである。しかも康熙三十九年の禁令にもかかわらず、如皋縣においては雍正年間に至るまで行われていたのであり、これによつて支辦した項目は、前にも引いたように李衛によつて、「必ずかくことのできない公事」と見なされた（九年三月七日）。硬臺の方は里甲ということが出でこなければども、恐らく前述した會典の硬臺というのと、類似もしくは同一の方法であろう。それはともかく、獨立税的な形をとつたもので、名稱のはつきりしているのは、この輭臺をあげうるにすぎないが、實は加派とか私派とか呼ばれてしばしば禁止されているものは、火耗でない限りはまずこのような獨立税的なものと考えてよい

であろう。

つきに人民の負擔としては間接的なもの、したがつて直接的には官僚その他人民以外に負擔のかかるやり方がある。その第一にあげるべきものは俸工の捐出である。俸は官僚の俸銀であり、工は胥吏や衙役の工食銀で、いずれも俸給の意味である。その一部または全部を公費として供出するのが捐である。その實例はすでに前節でいくつかあげておいたが、そこで見たように、省の公費については省内各地方から俸工を布政司に送らせて、まとめて使うという例が多い。捐というのはもともと自發的に提供するという意味を持つ筈であるが、上官の方できめて屬官にわりあてるような形になると、これは半強制的なものにならざるを得ない。そこで屬官の方でも出ししむるということが起る。王士俊の奏摺には、廣東においては火耗を公用に充てる前は、事ごとに州縣にわりあてていたが、州縣の捐解が完了しないので、今なお過去の未充分を督促しているという報告がある（六年十一月十五日）。これなどはそういう割當供出に對する抵抗のあつたことを物語る史料であろう。

つきには民間から提供される規禮に對して、屬官から上

官に對するつけとどけがある。餽送とか餽遺とか、あるいは民間からの規禮と同じように、節禮（季節ごとの挨拶）とか壽禮（誕生祝）とかいう形で行われる。たとえば甘國奎の報告によると、浙江按察司衙門には、さきに各屬の四季の節禮があつたという（二年十一月二十四日）。俸工の捐出がはつきり公費としての目的があつたのに對し、この方はむしろ個人的な場合が多かつたと思われるが、しかし右の例ではそれが衙門に歸屬するものとされているように、上級の地方官にとつては、やはりなにがしかは公費的なものへの支出にあてる財源となつたであろう。

最後に他の正規の支出項目から轉用する場合がある。いわば豫算の流用であるが、そのためには正規の支出項目の金額を水ましすることになる。巡撫法敏が四川の軍務および公事を辦理するについて、以前は「軍需を水まししてうけとつた（浮冒）ものと、私派の銀兩とから支出していた」と述べているのがその例である（四年六月四日）。

以上のように直接人民の負擔という形をとらないものについては、禁令も殆ど出ていないようである。もつとも最後にあげた浮冒の方法は、會計上の不正として少くとも表

向きは嚴重に追究される可能性があるが、前二者は暗黙のうちに認められていたのであろう。ことに俸工の捐出については、自分のふところを痛めてまでも公務を果すということになれば、當時の官僚の名聲をえようとする氣風からして、ある場合には随分無理をしたり、あるいは官僚相互間の競争のような形で行われることもあつたのではないかと思われる。

## 六 公費と火耗の提解

さて雍正帝は以上のような種々の方法で暗黙のうちに處理されていた公費を、新たに官僚に給することとした養廉とともに、主として火耗で賄うことをきめたのであつて、その最初は清國行政法<sup>第六卷</sup>二六頁に指摘されたところでは、雍正二年のことであり、この方法を提唱したのは山西巡撫諾岷であつた。ただし清國行政法には皇朝文獻通考<sup>三卷</sup>に見える上諭を、諾岷の上奏に對するものと解しており、文獻通考にも確かにそのように書かれているが、實は同じ文獻通考<sup>一四卷</sup>にもう一箇所この上諭が出ている。そこでは總理王大臣九卿科道らが山西布政司高成齡の條奏を議覆したのに

對するものとなつてゐる。兩者は字句に少しばかり出入があるけれども、内容は全く同じで、別々に出された二つの上諭ではなく、一つの上諭であることは疑う餘地がない。

冒頭のところがちがうので、うつかりだまされるけれども、實は諾岷の奏に對するものとされている方が、最初の四十字ばかりを缺いているにすぎない。文獻通考がなぜこのような誤りを犯したかは明かでないけれども、とにかく別物として二箇所に出されたうちの一方は誤りとしなければならぬ。東華錄(實錄も同じ)を検してみると、この點が明かになつてくる。すなわち、東華錄雍正二年六月乙酉の條に、高成齡の上奏とこれに對して總理王大臣らに會議具奏せよという諭旨とが見えるが、これは硃批諭旨中にも見えるものである(高成齡、二年六月八日)。ついで七月丁未の條に總理王大臣らの議覆に對する上諭が見え、これが文獻通考の二箇所に出ている上諭であつて、これからみると文獻通考のものは數箇所に省略がある。してみれば、雍正二年の火耗の提解に關する上諭は、高成齡の上奏についての議覆に對して下されたものであつて、文獻通考<sup>三卷</sup>の記載が誤解によるものなることは明かであり、清國行政法もそ

の誤りをついだことになる。もつともこの誤りはきわめて些細なものである。というのは、火耗の提解を最初に發議したのは、やはり諾岷だつたからで、創唱者を諾岷とすること、これについての雍正帝のまとまつた考え方を示すものとして、前記の上諭をあげることの二點においては、何ら誤りではなかつたのである。諾岷がまず火耗について上奏したことは、高成齡の右の奏摺中に見えており、同じく三年二月八日の奏摺には、その内容についても少しく記されている。また雍正帝自身も火耗の提解が諾岷の創始になることをいつているから（石文焯、二年三月三日、張坦麟、五年十一月一日など）、諾岷自身の奏はみることができないけれども、その事實については疑いがない。また諾岷がはじめて火耗について上奏した時期については、雍正五年に山西巡撫となつた石麟が、雍正元年十一月のことだつたと述べている（石麟、五年十月二十日）。

さてここで右の石麟の奏摺、あるいは高成齡の奏摺（三年二月八日）によつて、諾岷の行つた火耗提解のやり方を見よう。まず高成齡によると、山西の州縣では、從來正項錢糧一兩につき、三四錢もの火耗をとつていた。雍正元年

五月諾岷が巡撫として着任すると、加耗の率を二割すなわち一兩につき二錢にとどめ、山西全體で耗銀五十萬兩を得た。その中から養廉銀と公費とに三十萬兩を給し、残る二十萬兩を虧空の穴うめに使おうというものであつた。三十萬兩のうち、養廉銀と公費とがそれぞれだけの額を占めていたかは明かでないが、石麟によれば諾岷の奏摺中にはつぎのような項目が開列され、その必要額は合計六萬四千餘兩だつたという。すなわち、

修理城垣衙署 修築汾河堤岸 義學東修 沙虎口馬匹料  
草並倒斃馬匹 各衙門心紅紙張書辦工食 布政司搬銀工  
價提塘報資等項

とあり、これが即ち公費の使途であらう。このような計畧を盛つた諾岷の奏摺は、雍正帝の承認を得て、直ちに實施されたようである。そして河南巡撫の石文焯は、早速これに倣つている（石文焯、二年一月二十二日、同年三月三日）。諾岷の奏摺に、帝がどんな硃批を下したかは判らないが、かれを相當高く評價していたことは、石文焯の奏（二年三月三日）に對して、

汝のこのいくつかの奏摺は、諾岷のやつたことに倣つ

たもので、賢者をみれば自分もそれとひとしからんことを思うという意味に、はなはだ合致している。

と述べていることから明かである。これは諾岷は勿論のこと、石文焯に對しても、一應ほめてゐるわけで、したがつて奏中に述べられた耗羨の提解についても、はつきりそれとはいつてないけれども、よき手段としては認していたことが推察できる。ところが諾岷・石文焯のこのような動きに對し、二人の名をあげて反對したのかどうかは明かでないが、内閣から火耗の提解を禁じてもらいたいという條奏が出た。高成齡は邸抄の中にそれを見出して、それでは困るといふわけで、二年六月八日の奏摺を書いたのである。高成齡の意見は後述するとして、これまでのところ、雍正帝は諾岷・石文焯の二人に内密に承認を與えはしたけれども、表立つて火耗の提解を承認したり、あるいは奨勵するようなことはなかつた。だからこそ提解を禁止したいという條奏も出てきたのであろうが、實はこのとき帝の火耗あるいは公費についての見解は、まだ十分確立していなかつたのではないかと思われる。というのは元年にはまだ、第四節で引いた孔毓珣に對する硃批（元年二月二十四日）に

みられたように、一切の公務に正項錢糧を支出すればよいなどと言つてゐる。簡単に正項錢糧を支出することにして片附けられぬところに、問題のむづかしさがあることは、そののちになつて悟つたのであろう。そして諾岷や石文焯に對する氣持は、よさそうだからやつてみたらよい、という輕いものだつたかも知れない。さもなければ、火耗の提解を禁じたいという條奏があつたとき、既に何らかの意志表示をした筈である。實際は高成齡のいわば抗議的な上奏があつてのち、これを總理王大臣に命じて九卿詹事科道と會議せしめるという慎重な措置をとり、七月になつてその覆奏があつてから、これに對する諭旨という形で自己の考を明かにしたのである。それ故高成齡の上奏もまた、この問題に關して雍正帝の考を固めさせるのに、有力な役割を果したことと思われる。

そこでこの高成齡の二年六月八日の奏摺の内容をつぎに紹介しよう。その論點はいくつかあるが、要は火耗は率を定めて徴収し、これを一旦上司のところへ提解し、然るのち適當に分配するのがよいというのである。ただし州縣において火耗を徴収すること自體は、既定の事實として書か



れており、その點では提解を禁止しようとする方の意見でも同じである。前節で一寸ふれたように、康熙年間以來公然たる慣習となつていたのであらう。さて高成齡が提解の禁止に反對した第一の點は、州縣の徵收する耗羨と、屬官から上司へ送る節禮との關係についてである。すなわち、

條奏にいうところでは、結局耗羨を州縣が當然得る筈のものと考え、上司はよろしく提解すべきではないと。

これは耗羨と節禮とがもともと相互關係にあるということとを全く知らないもので、上司が耗羨を提解しなければ、屬官は必ず節禮を呈送するであらう。

その贈り物を禁止してしまえば、かえつて弊害が生ずるから、やはり耗羨銀兩は布政司庫に提解し、大吏によつて分給するのが一番だといふのである。しかも耗羨を提解しておけば、省としてやむを得ない公費が必要になつたとき、その中から支出すればよいので、州縣に割りあてゐる必要はなく、そうすれば州縣もそれを理由に里甲からとりたてるといふことがなくなるとつけ加えている。

つぎに「火耗を提解するのに毎兩いくらという限度を定めると、租税の督促に人民撫育の意を寓することができな

い」という禁止論に對しては、現在すでに山西では以前にくらべてうんと率をへらしているし、「もし一定の限度を設けなければ、不肖の州縣官はかえつて勝手に増徴することができ。」限度を設けてそつくり提解することにすれば、勝手な増徴を禁止することになるので、この方が撫育の一法であるといつてゐる。また「公けに取つてそれを分給するのは、大臣が屬員をはげます方法ではない」という意見に對しても、上司はいくら清廉にしても、やはり幕賓などに必要な費用があるから、こつそり餽遺をもらうよりは、はつきり養廉を分配する方がよいし、その方が部下に對しても嚴格な態度がとれるといつて却けてゐる。さらに耗羨から虧空の穴うめをすることも、以前のように不公平なごまかしの處置をするよりまさつてゐるといつて、諾岷の奏した方法によつて行つてゐる山西の現状を述べてゐる。最後に全國の總督巡撫に命令して、諾岷の方法に倣つて、省全體で一年に耗銀がいくらになるかをまず上奏し、年末に養廉として給したもの、公費に支出したものの、穴うめに使つたものの、それぞれいくらになるかを上奏させるようにして頂きたいと結んでゐる。

前述したように、雍正帝はこれを總理王大臣以下の會議に附した。その結果議覆されたところは、はなはだ帝の意に満たないものであつた。「今汝らの議したところをみると、見識淺小で朕の意と合わない」と痛撃を加えた上で、帝は詳細に自身の考を述べている。既に清國行政法にも一部引用されたものではあるが、以下にその要點を拾つてみよう。

まず州縣が火耗を徵收することを、既定の權利のようにみなしていた官僚の考に對して、本來とるべきものではないと反駁を加え、けれども「通省の公費、各官の養廉にはここから取らざるを得ないものがある」といつて、全然火耗をとらないのが理想だが、從來の行きがかり上致し方ないとしている。そして高成齡の第一の論點になつたと同じ州縣官と上司との惡因縁を述べ、「上司が火耗を出して州縣官を養う方がましだ」と斷ずる。このところは全く高成齡の意見に賛同している。つぎに各州縣の火耗の率をきめたという覆奏中の意見に對して、そうすれば錢糧の多い州縣はよいが、少い州縣では困る。むしろ率を定めてない方が、事情によつてなんどきでも減額ができるに對し、率をきめれば、將來それより増すことはあつても減ることがな

いとして、率は定めることができないという。率については高成齡の第二の論點と反對の結論に達したわけである。

但し以後實際に各省で行われた例をみると、結局省ごとに率を定めており、帝がここでいう通りに實施されたわけではない。第三に、覆奏では火耗を提解するときに、州縣の得るべきものはその額だけさし引いたらよいとするに對し、これはまた高成齡の意見と同じく、やはり全部提解してその上で分けてやる方が弊害が少いとしている。また提解して虧空のあなうめに使うことは「國計に益あり」といつて、とにかく全額提解する方がよいと、理由はやや異なるけれども、高成齡と同じ結論である。

このほか、雍正帝は覆奏の中に諾岷と高成齡の二人は優秀な人物だから、まずこの二人に命じて、山西省で試験的にやらせてみようという意見があるのをとらえ、行うべきか行うべからざるかの兩端あるのみで、行うべからざるものなら山西だけに試行させるといふことはできぬし、行うべきなら天下に行えばよいと反論している。これはやや極端な議論であるが、果してつぎの論點と關聯して、結論において態度を緩和している。そのつぎの論點すなわち最後

の點は、覆奏に火耗の提解は恒久的な方法ではないと述べていることと關聯している。諭旨に引用された覆奏の中で、帝が賛成しているのは、實にこの點だけであつて、「今火耗を提解するのは、もともと一時の假の方針である」と言明し、官僚がみな阜變稷契のごとくなつて、「國庫金に穴をあけたり、人民をはぎとるようなことをせず、各省の火耗がだんだん輕くなつて、結局全部廢止されるようになるというのが、朕の願ひである」といつている。以上全體にわたる結論として、

朕もその將來に弊害がないかどうかを保證することはできない。各省で實行できるところは行ふことをゆるし、行わないものにも強いてやらせる必要はない。

と述べているところは、前段のはなはだ積極的な意見と、ややくい違ふような感じもするが、雍正帝としては、皇帝の命令という強制力を用いないで、しかも實際にはこの方法を行わせようという考えだつたわけである。たとえ結論において多少ぼかされてはいても、これだけにつきり皇帝の意見が表明されたなら、地方官としては行わないわけにはゆかぬ。果して數年の内に火耗の提解は全國で行われる

ようになった。しかもその場合の責任は、すべて地方官にあるのであつて、もしまうことが起つても、その責任は皇帝のところへは行かないやり方である。するいといえはするい方法で、始終官僚たちの名聲欲をいましていた帝も、やはり皇帝としての名聲にとらわれることを免れなかつたのではなからうか。

ともあれ右のような次第で、雍正帝は諸氓が創始し、石文焯・高成齡が推進した火耗提解の法を採用し、これによつて從來の地方行政、官場の不合理や不明朗を一掃しようとしたのである。もつとも、火耗の提解は單に公費の問題を解決するためばかりでなく、官僚の養廉、多年にわたる國庫の虧空をも、併せて解決しようとしたものであることは、既に述べてきたところから明かであろう。したがつて、火耗の提解に關する全面的な考察は、同時に養廉や虧空の問題をも考慮に入れて行わなければならないが、本稿では公費の問題を主とするため、一通りの經緯を述べるにとどめた。そこで最後に、このようにして出發した加耗提解の法がどのように行われ、その中で公費がどんな比重を占めていたかを硃批諭旨に見える若干の實例について述べてみよう。

まずこの法の創始された山西については、諾岷の最初の計畫のあらましは前述したが、高成齡は同省における雍正元年分の火耗の収支について報告している（三年二月八日）ので、それをつぎに紹介しよう。それによると、火耗収入の總計は四十九萬五千六十八兩零、その内罷免された官僚が穴をあけてまだ納入していない分が五萬三千五百十九兩零、人民の未納分が一萬四百五十兩零で、實收額は四十三萬一千九十八兩零である。この中から支出として國庫の穴うめのために布政司庫にとどめたものが二十萬兩、各官の養廉に給したものが十一萬五百十三兩零、各州縣の雜項・繁費・傾銷の脚費・御塘馬匹の加増の草料などに給したものが計二萬一千二百四十二兩零、通省の公費が計七萬一千一百兩零、これらの合計は記していないが、餘剩銀は二萬七千五百四十二兩零とある。計算してみると約七百兩の誤差があるが、それはともかく、この場合公費の實収に對して占める率は約一六％である。しかし通省の公費と呼ばれるもののほか、州縣の雜項云々というのも、省によつては公費とよばれていたのではないかと思われる。第二節に引いた田文鏡の奏摺（七年六月十五日など）にあるように、通

省の公費とは別に、州縣官に公費を給している例があるからである。勿論その内容の細目は地方によつて必ずしも同じくないであろうが、山西の場合、それをも公費に含めて考えるならば、計九萬二千三百四十二兩零、約二一％の比率を占めることになる。さらにいわば正式の地方財政としての存留の額と、この火耗によつて賄われるものとを比較してみると、雍正會典<sup>卷三</sup>に見える雍正二年の山西の存留額は三十二萬八千二百九十兩餘である。それに對して火耗から出るものは、虧空の二十萬兩を別としても、二十萬二千八百五十五兩餘になるから、この兩者を含めたものを實質的な地方財政の規模とみなすならば、それは會典の規定額にくらべて六割餘も多いものとなる。

つぎに雍正帝が公けに意志表示をするに先立つて、早くも諾岷に倣つた石文焯の河南の例を見よう。かれの計畫は二回にわたつて上奏されている（二年正月二十二日、三月三日）。それによると、火耗の率は州縣によつて差があつたらしいが、平均一兩につき一錢三分餘、全省の額徴の地丁銀が三百六萬餘兩であるから、耗羨銀の額は四十萬兩餘となる。これを「養廉および各項の雜用・公費」に支給

すると、十五、六萬兩残るので、これは司庫に貯えて虧空の穴うめその他に使用するというのである。但し各官の配分額をみると、たとえば布政司は「養廉ならびに衙門一切の公費」として二萬四千兩というふうに、養廉と公費の合算額として記されているので、それぞれの金額は不明である。これは實際の支給に當つても、兩者の區別がされていなかったのかも知れない。というのは、養廉と公費とは、その使途の境界があいまいで、養廉銀から支出するものは全部個人的なものだとは言ひ切れないのである。たとえば趙弘恩は養廉銀の内から、「學院の養廉への補助、塘丁の報資の捐給などの公用」を支出しており（七年八月二十四日）、李衛は養廉銀について述べた中で、督撫兩衙門には家族や本人の費用のほか、「なお各項の公務の需がある」といつている（八年九月六日）。雍正帝自身も養廉を單に生活費の補助として考えていたのでないことは、「養廉の一項はもとと薪水および犒<sup>こく</sup>賞などの費用の必要のためである」（石麟、五年十月二十日）といつているところから明かである。このように養廉銀がその使途として、私的なものとかかなり公的なものと二種類の性格をもつていたことは、帝

をしてつぎのような弊害を指摘せしめることにもなつた。

近ごろ督撫はややもすると、養廉銀の内から若干を捐出して公用としたなどといつて朕に奏し、それによつて廉潔の名聲を博せんとする。しかも充公の項を倍も濫用しているのは、はなはだごまかしがうまく恥知らずの極だ（石麟、同前）。

それはともかくとして、石文焯のいうところでは各官に配分されたもののほか、

毎年の本省の公用、提塘の報資、塘馬を添設する工料、解費の補助、公務出張の旅費、州縣の錢糧發送の路費などの項は、みな耗羨の内から支出する。

とあり、これらが山西の例において通省の公費とよばれたものに當るようである。ともかくこれらと前述の養廉・公費との合計が二十四、五萬兩になるというわけで、假にこれを二十五萬兩として會典の雍正二年の存留額六十二萬六千六百二十三兩餘に比較すると、四割弱に當り、山西の場合よりは少いけれども、廣義の地方費の中でやはり相當大きな比率を占めていることが判る。

二年七月に雍正帝の上諭が出てからは、各省とも競つて

諸岷に倣うものが現れた。すなわち、同年中に直隸、山東、湖廣などに實施されたのははじめ、數年のうちに全國にこの法が行きわたることになった。しかし何分前述したように帝は直接手を下したのではなく、あくまで地方官の責任において行わせたのであるから、加耗の率が異なるのをはじめ、省によつて差異があり、また督撫の交代によつてやり方の變つた場合もある。たとえば河南・山東の場合は、のちに田文鏡が着任すると、養廉銀とも關聯してねり直したようである。とくに州縣の公費については、山東では州縣ごとに一分を扣留しており、河南では前述の石文焯の法にみるように、養廉と一括支給されていた（もつとも田文鏡は州縣の公費は河南にはなかつたといつてゐる）のを改めて、提解した一分の耗羨の中から、養廉同様州縣の大小によつて支給額を定めている（七年六月十五日）。また廣東では四分の火耗を提解して公用にあてていたが、それでは賄いきれないので（王士俊、六年十月八日）、六年十一月になつて、火耗の全額を一兩につき一錢六分九釐と定め、その中から七分を提解して院司の養廉ならびに通省の公用にあてた（郝玉麟、七年十一月十八日）。これで見ると廣

東の場合、州縣の養廉は州縣に扣留されたらしく、それは山西のやり方と重要な相違である。江蘇の場合も、張坦麟は二分を州縣に留めて養廉とし、八分を提解して各種の費用や督撫以下の養廉にするという計畫を立てたが、雍正帝はやはり諸岷のやり方を最善とし、それを模範と考えていたようで、「これでは山西省のやつたことと異なる」云々という硃批を下している（張坦麟、五年十一月一日）。

このように火耗の處置については、地方により時期によつてさまざまであり。硃批諭旨にはこれについての報告が極めて多い。それを整理してゆけば、恐らく殆ど省ごとに、火耗提解の行われるに至つた経過と、その實際のやり方を明かにすることができよう。ただし現在の筆者には、まだそれだけの準備ができていないことを遺憾とする。ただ最後に、はしがきでふれただけにしていた公項という語について、説明を加えておかねばならない。それはこの語が火耗提解の普及と、密接な關係にあると考えられるからである。

公項あるいは公項銀と呼ばれるものの用例は、公費と殆ど同様である。それが何に使用されているかを見ると、た

たとえば「城垣を修築し、河道を開濬し、塘閘を建立する」

(李衛、七年一月二十二日)のに用いられ、あるいは災害の際の賑恤の費用として支出され(田文鏡、五年十一月二十六日、李衛、九年十月二十二日その他)、あるいは倉廩(田文鏡、六年三月四日)營房(性桂、七年十一月十六日)など官廳關係の建築費に充てられているものもある。また船工の補助や督撫將軍衙門の需用などの公務にも支出される(張坦麟、五年五月二十六日)。そのほか種々の例があるが、要するに地方の公事あるいは公務を處理するために支出されるものと考えてよい。田文鏡も「正賦のほかにまた耗羨があるのは、もともと地方の公項でもつて地方の公事を辦理せんことを期しているのだ」(五年十一月二十六日)といっている。

ただこれが公費などの語と異なる點は、司庫公項(田文鏡、六年十月二十七日、鄂彌達、九年七月十五日、その他)とか庫貯公項銀(田文鏡、五年十一月二十六日)、あるいは省屬の公項(張坦麟、五年五月二十六日)などと呼ばれ、下級の地方官に關係した用例が全く見當らないことである。さらにもう一つ注意すべき點は、硃批諭旨の中にきわめて

しばしば現れてくるにも拘らず、その出現に年代的な限定のあることである。すなわち、現在までに筆者の氣附いた範圍内では、雍正五年頃からのちの奏摺には、頻繁に出現するけれども、四年以前の奏摺には極めて少ない。即ち李維鈞、二年六月十二日、陳世倌、二年七月二十三日、柏之蕃、四年五月二十日の三例を検出しただけで、このほかなお數例は見出しうるとしても、五年以後における使用頻度にくらべれば、問題にならぬ程少い。このことから、公項という語は五年頃から一般的に使用され始めた、一應推定することができよう。これは丁度、耗羨の提解がかなり多くの省で行われるようになった時期と一致する。これは偶然の一致ではない。筆者の考では、耗羨が提解せられ、公費に充てるために布政司庫に貯えられているものが、主として公項と呼ばれるようになったものと思われる。司庫に解貯せられた耗羨は、正規の國家財政とは違うけれども、やはり布政司の手によつて帳簿が作られ、款項と収支が記入される。そういう會計上の手續きについては、ここに詳述するいとまがないが、ともかくこれによつて、正規の國家財政に屬するいわゆる正項錢糧とならぶものとして、公

項が成立したのである。使用目的からいえば、公費といふ公用というのと同じであるが、公項という語の場合は、司庫に解貯せられた耗羨銀兩を、會計上の地位を主にして稱している趣が強い。そうだとすれば、耗羨の提解が普及するに伴つて、公項という語が廣く用いられるようになったのは、當然のことといわねばならないし、公項が司庫にのみ關係して現れることも納得できるのである。但し、それでは耗羨収入だけを公項と呼んだかといへば、必ずしもそうではなく、前にあげた公費の各種の財源から來るものも、奏明して司庫に入れた限りは、すべて公項と呼ばれ得たと思われる。張坦麟が「鹽規銀兩は省屬の公項銀兩である」(五年五月二十六日)といひ、陳時夏が「各商の出すべき舊規は、既収未収にかかわらず公項に屬する」(六年一月二十九日)といつてゐるなどを、その例證とすることができよう。

## 七　　む　　す　　び

本稿に述べたところを要約してみると、およそつぎのようにならう。

殊批諭旨の中には、公費とか公用とかいう費用を示す語があるが、それはまた公事あるいは公務のために必要な費用とも言われるものである、その内容はさまざまではあるが、要するに地方行政に必要な經費ということが出来る。これを公費という語で代表させるとして、公費的なものの源流をさぐると、人民の徭役に歸着する。明代後期にはそれが里甲銀、均徭銀などとして銀納化され、一條鞭法以後はそれらを合して丁銀と呼ぶようになった。明制をうけついで清朝の制度において、正規の租税とされる地丁銀には、したがつて當然それらの費用が含まれており、租税の地方に存留されるものは、地方官の俸給のほかは、そのような費用にあてられる筈のものであつた。そしてそれは、事實ある程度そうしたものとして支出されていたのであるが、いかに明制をうけついでものとはいえ、清朝の行政財政の規模が、いつまでも明代の舊にとどまる筈はなく、年代とともに膨脹することは不可避である。然るに税額あるいはその中の存留分は固定的性格が強く、新しくふくれ上つた分を賄うことができないので、地方官はそれぞれの裁量によつて適宜處理し、人民に對していわば闇の税をかけていた。



そこには種々の弊害を伴うことというまでもない。とくに地方官がそれを好便として私腹を肥すこと著しいものがあつた。雍正帝はこれらの不合理を解消するため、山西巡撫諾岷の發議を認め、從來公認されていなかつた火耗の徵收を許し、その中から公費を支辨させるとともに、一方では官僚に養廉銀を給與して、地方官が勝手に人民を搾取することを嚴禁しようとした。この方法は全國的に實施されるまでには多少の經緯があり、また若干の年月を要した。それは雍正帝の態度が、公然この方法を認めて全國一律に實施させるというのではなく、よい方法として推賞しながらも、その實施は督撫の自由意志に委ねたからである。それでも雍正五年頃にはかなり廣く行われるようになり、同時に公費などの語とならんで、公項という語が使われるようになった。

本稿に述べたところは、ほぼ右のようなことであるとして、最後にもう一言つけ加えると、火耗提解の法は火耗を正規の財政に繰り入れるというのとは異なる。公項と正項との間には嚴然たる區別が存する。公項は雍正以前の公費とはちがつて、皇帝の承認を得てはいるけれども、それは地

方官と皇帝との間の内緒の關係で、戸部など正規の所管官廳を通したたものではない。従つて財政上の扱いも正規の歲入歲出とは全く別である。實はその點をも説明する筈であつたが、その餘裕がなくなつたので、ただここには公項といえども戸部の與り知らぬことだつたという點を指摘するにとどめておく。雍正帝ともあろう者が、何故そんなまいなことをしておいたかといへば、それは既に述べたように、この方法を一時權宜の計として、將來火耗全廢の日の來ることを理想としていたからである。しかし帝の死後この理想は全く破れ去り、乾隆五年以來公式の制度となつたことは既に清國行政法<sup>第六卷 二七頁</sup>に指摘されている。その理由を考えてみると、公費と養廉の財源を別に求めない限り、火耗の廢止は不可能な筈である。養廉についてかりに帝の期待したように、官僚がみな皁纓稷契のごとくなつて、俸給も本俸だけで事足りるという事態を考えるならば、公費についてもそういう古代の、極めて簡素な行政樣式に復古することを考えなければ、とても取り除くことはできない。どちらでもできない相談だとすれば、結局帝の眞意は、増税の名を避けるために權宜の計と稱したのであろう。公費の

公認、火耗の提解は、雍正帝にしてはじめてなした大改革ではあつたが、右の點では今一步の合理性を缺いていたとも言えよう。

公費に關連して本稿で言い残したことは多い。本稿では一般地方行政關係についてだけ述べたが、それも不十分なものであることは御覽の通りである。このほか軍隊にも公費または公費糧なるものがあり、その財源は一般のものは全く異り、兵丁の缺員をこしらえてその分の俸給をとるものである。また筆者の意圖の一つとしては、公事とか公

務とかいわれる場合の、公という觀念がどんなものであるかを解明することがあり、それを通してこの時代の國家あるいは政治制度の性格にも及びたかつた。しかしこれらはすべて他日を期するほかない。

附記 このまずしい論考を草しえたについて、長い年月にわたつて御指導を頂いている宮崎、安部兩先生をはじめ、殊批諭旨研究班の方々の御援助に、感謝の微意を捧げたい。

# 前 號 正 誤

七二頁中段二〇行「經營学研究二三號」を「經營研究二三號」と訂正。

同頁同段二三行「晋の限客法にかんする……」の前に「經濟學雜誌三十五卷一・二號」を入れる。

八〇頁上段 總會および評議員會の期日は、いずれも十一月三日と訂正。

wealthy evaded recruitment by paying a certain amount of money. As frontier wars became more frequent, the burden became heavier, while sometimes the militia were often employed as fatigues at various government offices. The Ming Government collected payment in silver as substitute for militia recruitment, and used part of it for employing volunteers, and this in turn led to the professionalization of the militia. When the Manchu dynasty came in power, Emperor Yung-chêng tried to use the militia for keeping public order, but the Ch'ing militia which had become a mere fatigue party proved of little use for the purposes.

### **Public Expenditures in the Reign of Emperor Yung-chêng**

*Hiroshi Iwami*

In various "Instructions in Red" of Yung-chêng, we often meet with the words "public expenditures" which meant expenses spent for local administration. This kind of expenditures had been made available by corvée after the latter part of Ming, when the conversion of corvée into payment in silver money became general. In the Ch'ing period increases in local administrative expenditures were not spent from the Government's regular tax incomes, and the deficit was patched up by the local bureaucracy. Consequently, there arose many evils, and Emperor Yung-chêng approved the collection of provincial additional taxes which were to be spent for "public expenditures" and education. These additional taxes became to be known as kung-hsiang 公項, while the regular taxes were called chêng-hsiang 正項.

### **T'ien Wên-ching and 田文鏡 Boycott for State Examination**

*Toshikazu Araki*

In the second year of Emperor Yung-chêng (1724), the scholars of Fêng-ch'iu Hsien 封邱縣 concerted in action to boycott government examination as a demonstration against T'ien Wên-ching, the financial commissioner of the Province of Ho-nan 河南. In fact, he was a reformer who intended to shift economic and financial burdens from the shoulders of the peasantry